

〈書評論文・書評〉[書評]

小林隆(編)『全国調査による言語行動の方言学』

東京：ひつじ書房，2021，vii + 345p.，ISBN 978-4-8234-1071-0

椎名美智
法政大学

1. はじめに

本書『全国調査による言語行動の方言学』は、東北大学方言研究センターが2015年に行った「話し方の全国調査」で得られたデータを、12人の方言学者が分析し考察した論文集である。編者は東北大学を拠点に、長年にわたって方言学的日本語史、言語行動の地域差といった方言学の新しい研究分野を開拓し牽引してきた小林隆氏である。

本書は、以下の三部構成になっている。

I 概説編

小林隆 言語行動の全国調査

II 分析編

小林隆 依頼・受託の言語行為—配慮性と主観性の観点から—

篠崎晃一 買い物画面における言語行動の地域差—レジでの声かけ・少額の会計への高額紙幣支払い—

井上文子 はがきを買うときの言語行動—頼む・例を言う—

松田美香 「申し出る」と「受け入れる」—恩恵表現と機能的要素から見る分布の特徴—

竹田晃子 勧めの言語表現にみる地域差

熊谷智子 おつりが足りないとき、何と言うか—近畿の言語行動についての仮説—

椎名渉子 不利益を被る場面における非難の言語行動の地域差—東北と近畿に注目して—

津田智史 相手に寄り添う言語態度—のど自慢をめぐる言語行動の地域差を追う—

佐藤亜美 喜び・落胆の地域傾向

櫛引祐希子 連絡を伝える言語行動の地域差—話し手と聞き手の関係性に注目して—

尾崎喜光 忘れ物を注意する場面における言語行動と言語表現

中西太郎 新年のあいさつ・不祝儀のあいさつの定型性

III 総合編

小林隆 言語行動の地理的傾向—本書のまとめとして

本稿では、I 概説編、II 分析編から小林の各論、III 総合編を取り上げて、本書に示された方言学研究の方向性と語用論との関係性と意義について考えていきたい。

2. 「言語行為の全国調査」はどのような調査だったのか？

まず、I 概説編の「言語行為の全国調査」を概説して、調査がどのようなものであったかを見ておこう。多くの人にとって「方言学」と聞いて真っ先に頭に浮かぶのは、音韻、語彙、文法などの地域差を取り上げる研究だが、ここで調査されているのは「話し方」、つまり「依頼」「謝罪」「注意」「褒め」などといった言語行為である。これらは語用論研究の重要なテーマの1つなのだが、本書はそうした言語行為の構成要素（意味公式）の地域差を見るという点で方言学的視点を持っており、まさに語用論的方言学と呼ぶのがふさわしい方言学と語用論のインターフェースといえる。本書での言い方を借りると、ここで行われた全国調査は「構造面」ではなく「運用面」に注目したもの、言語行動の地理的研究の直接的資料、実証的な言語的発想法の地域差研究のためのデータ、「言語行動の方言学」の基礎づくりを目指したものという位置付けがなされた新研究分野で、今後の発展が大いに期待される。

語用論には、特定の形式に注目し、それがどのような機能を果たしているのかを調べる「形式から機能への対応づけ」と、特定の機能に注目し、それをどのような形式が担っているのかを調べる「機能から形式への対応づけ」という2つの異なる方向性の研究方法があるが、本書は後者の方向性で研究が進められている。前者は一定の形式に注目して事例を収集するので、比較的データが集めやすいのだが、後者はどこを探せばターゲットとする言語行為が見つかるのか、コンテキストを考えなければならないので、自然会話のデータは集めにくいし、ロールプレイや聞き取り調査をするにしても場面設定が難しい。また多様なデータが集まるので、分析作業も複雑である。本書は、そうした言語行為に焦点を当てたチャレンジングな研究なので、調査方法の点でも分析においても複雑な方向性を有している。それを方言学の調査方法を使って全国規模で行っているという点、また方言学の新しい方向性を模索しているという点で、価値のある調査と論考であると期待できる。

調査は、以下の4つの方針に沿って実施されたものである。

- (1) 調査地域： 方言地理学の方式で、全国にまんべんなく調査地点を設ける分布把握型とする。

- (2) 調査対象者： 古い方言の状態を残している高年層の男性を対象とする。
- (3) 調査方法： 通信調査法による記述式と選択肢からの選択式を併用する。
- (4) 調査内容： 回答者の属性と対人関係を限定し、多種類の言語行動を対象とする。

調査項目には、「要求」表明と反応、「恩恵」表明と反応、「疑問」表明と反応、「感情」表明、「主張」表明、関係構築という9つの分野が設定されている。実際の質問事項を見ると、この調査が私たちの日常生活における言語活動のきめ細かい側面を見ようとしたものであることがよくわかる。例として、「要求」の表明と反応についての質問を見ておこう。これは記述式の調査例で、1項目の下に2つの言語行動の目的と調査文がある。

(例1)

項目名： 荷物運びの手伝いを頼む

主たる言語行動の目的： 頼む

調査文： あなたは荷物を運んでいます、とても重くてたいへんだとします。そこで、一緒にいる近所の知り合いに半分もってもらおうと思います。このとき、あなたは相手に対してどのように言いますか。

(例2)

項目名： 荷物運びの手伝いを頼む

主たる言語行動の目的： 受け入れる

調査文： それでは、立場が逆で、荷物をもっているのが近所の知り合いだとして、相手からそのように頼まれたら、あなたはどのように答えますか。

具体的な調査方法を見ると、まず全国で2000地点を選定し、その市町村教育委員会・公民館に調査票を送り、853件の回答を得ている。注目しているのは、その地域の方言を保持していると思われる高年層男性である。回答は主として記述式なので、同一の回答例はほとんどなく、微妙な差異と類似性を持った連続的な回答が数多く得られただろうと推測される。何を類似点・相違点を見極めてデータを分類し、カウントするかが分析の鍵となるわけだが、方言学ではあまり前例のない方向性なので、本当に時間のかかる大変な作業だったに違いない。

方言学研究なので当然のことだが、標準的な表記と異なる膨大なテキストデータを前に、分類方法やカウントの仕方について、どの分析者も一度ならず途方にくれたであろうことは想像に難くない。

3. 「依頼・受託」という言語行為の分析

次に分析編を見ておこう。上に引用した目次に示されているように、12人の著者はそ

それぞれ異なる調査項目を分析しているが、ここでは上記の（例1）（例2）の回答を分析した論考、小林論文「依頼・受託の言語行為—配慮性と主観性の観点から—」を取り上げる。ここでは、北海道と琉球からの回答数が少なかったため、東北から九州の6地域からの回答が比較されている。談話を「発話要素」に分割し、その機能を観察している。ここでの「発話要素」とは、語用論研究で「意味公式」といわれている概念に対応している。

依頼には〈要求提示〉、〈状況説明〉、〈意向確認〉が、受託には〈承諾表明〉〈意向確認〉が使われているが、依頼での〈要求提示〉、受託での〈承諾表明〉という必須の要素においては、地域差は見られないとしている。地域差が出るのは、「申し訳ない」「すまない」といった〈恐縮表現〉による相手への配慮の現れ方（「配慮性」）、そして「大変だ」といった主観的な表現が出ているのか否かといった「客観性」（または「主観性」）の部分だとしている。地域ごとの〈恐縮表現〉については、出現の百分率を比較して、「関東から近畿にかけての地域での使用率が高く、その両側の地域で低い」「中四国の落ち込みが目立つものの、全体的に見てそれほど極端な地域差があらわれているわけではない」とされている。

〈恐縮表明〉（例：わりいけつとよう）と〈状況説明〉（例：ちょっと重いので）の出現順番を見ると、全体的にどの地域も〈恐縮表明〉が先で〈状況説明〉が後にくる傾向があるが、どちらかという〈恐縮表明〉先行型は近畿を中心に全国的な傾向、〈状況説明〉先行型は東北・九州といった周辺部だと述べられている。

これらの分析は、語用論研究におけるシークエンス、または連鎖に対応している。言語行為は一連の連鎖から構成されており、必ずしも全ての構成要素が発話されなくても、言語行為として機能することが知られているが、ここでは地域によってどの要素が発話されるのか、その選好傾向が異なるという指摘がなされている。

相手への負担を減らそうとする「ちょっと」類の使用率は、西高東低だという。「ちょっと」が発話のどこ（「冒頭」か「途中」）に出てくるのかについては、東日本では「途中」、西日本では「冒頭」に使われるという東西差があり、西日本では発話の開始部で定型句のように使われているとしている。

受諾においても同様に、配慮性、主観性に焦点を当てて、どのような語彙がどのような頻度で使われているのか、それらの談話内での位置、要素の連鎖の順番を地域ごとに比較する考察がなされている。〈恐縮表明〉は「恐縮緩和類（例：無理するな）」「謙遜表明類（例：私でよければ）」「心配表明類（例：大丈夫か）」「努力賞賛類（例：よく一人で持ったな）」「意向確認類（例：これでよいか）」の5つに分類され、それぞれの語彙のバラエティと出現数が、地域ごとに詳細に調査され、比較されている。「気にするな」「無理するな」といった直接的表現は東北が多く、「いつでもどうぞ」「お安い御用だ」といった間接的・偽装的な表現は中部、中四国にかけての、九州を除く西日本的な特徴だとしている。

このように、依頼と受諾における日本語の方言を配慮性と主観性から観察した結果、著者は「配慮性基底型」と「主観性牽引型」という2つの類型を導き出している。前者は、

文字通り配慮性が言語行動の基底にあり、依頼においては恐縮の態度を示し、受託においては相手の恐縮感を軽減する方向性を持った言語活動を行うと同時に、主観を全面に押し出さないというタイプで、西日本的・中央的、特に近畿地方に顕著だとしている。一方、後者は主観性が言語行動を牽引するタイプで、依頼側は自分の窮状を訴えかけ、受託側はそれに同調し強関係性を図るもので、東日本的・周辺的、特に東北地方の特徴だとしている。こうした傾向は小林・澤村(2014)の言語的発想法の地理的傾向とも一致している。

発話要素の設定、そこで使用される語彙の多様性、使用頻度、機能、要素の発言順、談話内での位置を調査する分析の方向性は語用論の調査法と同じなのだが、それらの差異に影響を与える要素が地域差にあるとする見方が、本研究を方言学たらしめている重要な点だといえる。

4. 「言語的発想法」という考え方

最後に、III 総合編の小林による「言語行動の地理的傾向—本書のまとめとして」を取り上げておきたい。これは「言語的発想法」(小林・澤村 2014)に基づいて、II 分析編で取り上げた12の論考に共通する特徴を探り、地域性との繋がりを探ろうとする論考である。「言語的発想法」とは、ものの言い方、つまり「言語行動や表現法に対する思考や好み」のことで、ここでは7つの発想法が示されている(pp. 327-328)。

- 発言性： あることを口に出して言う、言葉で何かを伝えるという発想法
- 定型性： 場面に応じて、一定の決まった言い方をするという発想法
- 分析性： 場面を細かく分類し、それぞれ専用の形式を用意するという発想法
- 加工性： 直接的な言い方を避け、手を加えた間接的な表現を使うという発想法
- 客観性： 主観的に話さず、感情を抑制して客観的に話すという発想法
- 配慮性： 相手への気遣い、つまり、配慮を言語によって表現するという発想法
- 演出性： 話の進行に気を配り、会話を演出しようという発想法

小林・澤村(2014: 166-167)では、これらの発想法はものの言い方の発達として捉えられている。「口に出さないことより出すことの方が、主観的に話すことより客観的に話すことの方が、それぞれ言語的発想法と呼ぶのに相応しいと判断」できるからであり、「ものの言い方の変遷として、『無言性』から『発言性』へ、『主観性』から『客観性』へといった一定の方向性」が想定できるからだとしている。「言語的発想法の変化は『無言性』が抑えられ『発言性』が強められる方向(=『発言化』)へと進むものであり、そうした「定型化」「分析化」「加工化」「配慮化」「演出化」は「発達」と捉えられている。

この言語的発想法にはそれぞれに地域差があるとしている。一例、引用する。

①発言性 口に出すという傾向は概して近畿を中心とする西日本に強く、東日本と九州、とりわけ東北にその傾向が弱い。ただ東日本の中でも関東（特に東京）は近畿と近い面もあり、ものを言う傾向もうかがえる。（小林・澤村 2014: 168）

小林は、これらの発想法は言語の発達過程を示すものとして捉え、以下のような地域差があるとしている（p. 328）。なお、ここでの「発達」「未発達」といった語句は、優劣を示すわけではなく、言語的発想法がどちらに傾斜しているかを示す語句として使われているとある（小林・澤村 2014: 169）。

発達地域： 近畿地方

準発達地域： 西日本（九州を除く）、東京

準未発達地域： 東日本（東北を除く）、九州・琉球地方

未発達地域： 東北地方

著者が指摘するように、ここには「西日本」対「東日本」という対立と、「中央部」対「周辺部」という対立の地域差が認められる。この2つの対立を重ねると、「西日本」かつ「中央部」である近畿地方はいずれの発想法においても最も発達した地域であり、「東日本」かつ「周辺部」である東北はいずれの発想法においても最も未発達な地域だということになる。

さて、なぜこうした言語活動の違いが生じるのかについては小林・澤村（2014）に詳しいが、ここで概説しておこう。言語環境は社会環境に影響を受けるもので、社会環境によってコミュニケーションのあり方の性格が異なってくるが、コミュニケーションが複雑になり活性化すると、無言ではいられなくなり（「無言性」の抑制）、何かを言わなければならない（「発言性」の促進）。また、効果的なものの言い方をするためには、「相手への気遣い」を示し、「加工化」「客観化」といった過程を経て、発想法へとつながっていくとしている（小林・澤村 2014: 174）。

近畿と東北が様々な言語行為を構成する要素だけでなく、7つの言語的発想法においても大きく異なるという指摘は、東北出身の方言研究者ならではの洞察と発想によって調査結果を解釈する興味深い主張ではないだろうか。大掛かりな調査を実施し、それを統一的な方針で分析して考察するという本書で示された一大プロジェクトの実践は、方言学という学問領域の底力を示すものだと思う。方言学においてはもちろんのこと、語用論研究としても評価されるべきであり、その意味で本書は貴重な論文集だと思われる。

5. おわりに

言語学には多くの領域があり、分野によって調査や分析における方法や慣習が異なるこ

とはいうまでもない。それを十分承知の上で、本書を語用論研究の側から眺め、方言学的語用論として捉えて論じてみたい。日本の語用論研究では、通時的变化を捉えようとする歴史語用論はあるが、同一言語内の地域差に注目した研究は、管見の限りあまりない。英語での語用論研究では、英語文化圏における地域間、及び地域内の対照研究が少しずつ出版されてきており、新しい試みとみなされている。例えば、アイルランドとイギリスにおける英語の口語表現の差や、AAVEと呼ばれるアフリカ系アメリカ人の口語英語と標準英語の口語表現の違いを論じた研究などがそれである (Culpeper and Haugh 2014: 151-154, 248-249)。語用論が元々英語文化圏から出てきたものであることに加え、学問領域自体にそれほど長い歴史があるわけではないためか、世界的に見て、語用論研究は英語圏での研究に普遍性を見出そうとする傾向が強いように思われる。評者自身、日本での語用論研究では日英語の語用論的比較まではなされても、日本国内の地域差にまで注目したものはあまりないと考えていたが、小林・澤村 (2014) と本書に出会って、それが誤りであったことに気がついた。地域差に注目した語用論研究は、日本では方言学においてなされていたのだった。

語用論ではいま、英語中心主義を見直す視点が徐々に広がっているが、日本での語用論研究においては、それだけでなく、隣接領域への目配りがなされる必要があるということである。それはちょうど、英語から始まった歴史語用論研究と同様の視点を持った研究が、日本語学で長らく歴史語用論研究と交わることなく実践されていたことと同じ現象かもしれない。相互交流が希薄なために、同様のアプローチで研究が行われていることに双方が気づかず、それぞれの知見が共有されていないという学術的にはもったいない状況である。本書はそのことに気付かせてくれる貴重な研究書であった。

さて、本書の語用論研究への意味合いの重要性を十分に認識した上で、気になったことを2点ほど記しておきたい。1点目は、これまでも指摘されているようだが、言語的発想法の4つの発達段階のネーミングである。「発達」「未発達」といったラベルは、優劣ではなく、言語は一方方向性を持った変化するという想定の下に、各地域がその発達軸上のどの段階に位置するかを地域差として捉えるためのネーミングだとしている。そうした断り書きがあってもなお、「発達」という語が「前よりも後の方が良い」ことを含意するため、違和感を覚える読者がいるかもしれない。今の時代、より中立的な用語の方が受容しやすいだろう。また、今年度の年次大会のシンポジウムでは、発達地域でない言語発想法は段階を経て徐々に発達地域の発想法へと変化していくと想定されている旨の説明があった。そうなると、将来的に発想法の地域差はなくなることになる。どのくらいのタイムスパンでそうした発想法の均一化が考えられているのかが、ぜひ知りたい。

2点目は、分析編の多くの論考において、地域差が主にパーセントの比較やグラフ化によって判断されており、統計的分析が使われていないことである。大量のデータを扱う量的分析で多寡を論じ、地域差を指摘するならば、実数による統計的検定は必須である。ぜひ

導入してほしい。

本書は、方言研究に語用論的視点を導入し、言語行為に注目した大規模調査を実施し、その結果を言語的要素によって分類し、その語彙調査、要素の連鎖や順番を比較する量的調査をするだけでなく、使用語彙の多様性を詳細に論じる質的分析を行なっている点に特徴がある。そうしたミクロな視点からの各論を総合し、言語的発想法という、より抽象的な観点からコミュニケーションの地域差を把握しようとするマクロの視点を持っていることに最大の特徴がある、語用論的方向性を持った新しい方言学の研究である。今後の発展が大いに期待されると同時に、方言学と語用論とのコラボレーションの可能性と必要性を強く示唆する論文集だといえる。

参考文献

- 小林隆・澤村美幸. 2014. 『ものの言いかた西東』(岩波新書)、東京：岩波書店.
- Culpeper, J. and M. Haugh. 2014. *Pragmatics and the English Language*, London: Palgrave Macmillan. [邦訳：ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー（共著）椎名美智監訳（2020）加藤重広・滝浦真人・東泉裕子（訳）『新しい語用論の世界—英語からのアプローチ—』東京：研究社.]